

# AQUA

ここは富水 すどう美術館の新しい活動の場  
 こんこんと水が湧くようにアートも汲めども尽きない希望が湧いてくる  
 水はわたしたちになくってはならないもの「AQUA」が誕生する

2013年2月発行31号 すどう美術館  
 〒250-0853 神奈川県小田原市堀之内373  
 TEL.0465-36-0740 FAX.0465-36-0739  
 info@sudoh-art.com  
 http://www.sudoh-art.com

## 個展によせて

船坂芳助

4月30日より5月12日まで、すどう美術館で個展を開催します。版画のほかに、和紙に落書をして破り表に「のり」を付けて貼ったドローイングによるコラージュを同時に展示します。欧米では普通版画と一点制作の作品を同列に展示する事はほとんどありません。一点の作品の単価に差がありすぎると版画と絵画作品は普通別々の画廊で扱います。今回は展示室も広く又、別々に展示ができますので両方を発表する事にしました。

版画を制作していると完成後、自由に作品に手を加える事ができません。作品に手を入れたい衝動に駆られます。そんな事で版画を制作しだして早い時期から平行してドローイングを始めていました。ドローイングも版画的に描いた側に「のり」を付けて貼ってゆく事で重なった所は少しずつ薄くなります。破って貼るので直接描いた線が全部裏から見えている線、色です。版画

も反転して作品になります。なぜこんなめんどろな事と思われるかもしれませんが、出来るだけ自由な思惟のつながりと面ができます。

すどう美術館は10年間銀座で開館され、5年前小田原市の富水(とみず)に移転されました。銀座にある時から現代美術の啓蒙につくされていました。出前美術館、若い作家を選考してヨーロッパへ短期留学の機会を作ったり、アーティストインレジデンスで外国の作家を招聘したりして日本の若い作家との交流を盛んに行っています。又個展も開催してまっています。数少ない貴重なギャラリーです。少し不便な所ですがぜひお出掛け下さい。小さな美術館という名称ですが帰りは何か大きなものが残ります。個展中も5月4日は2時よりトークと木版画の一版多色の摺りを実演し見ていただけます。ぜひお出掛け下さい。

## 第二回アーティスト インレジデンス実施に向けて

すどう美術館では、須藤一朗館長が、小田原市や多くの企業、団体、個人の方々のご支援をいただき、西湘地区アーティストインレジデンスを実施し、市民やマスコミ関係者などの方々の多大な評価をいただき、会期中の公開制作や小学校のワークショップなどにも招待された喜び、一般の人たちとの交流がはかられたのもよかったと思っています。制作も楽しんで国内内外のアーティストに招待し、刺戟しあっている制作を続けたいと思っています。

たことであり、一回で終わりにするのではなく、継続実施することが当初からの目的でありました。そのための、最初の経験をもとに、現在、第二回目の「アーティストインレジデンス」実施に向けて準備を進めています。時期は今秋十月頃を予定しております。あため、宿泊場所、制作場所の展示場所などの確保にあたり、招待アーティストは前回と同じように海外から十二名程度を考えておりますが、国内から十二名程度を考慮して参加させてほしいとの自薦、他薦の申し出が来ております。最後に、今回またこのプロジェクトを成功させるためには、多くのご支援、ご協賛がどうしても必要です。趣旨にご賛同いただければと思います。

## 点描

### こんな話でよかったら (18)

仙仁司

特別な思いを持って郷里の山を描く人は多い。同郷の画家K氏(故人)は蔵王山に執着した。遠くから、近くに寄って、立ち位置と方角を変えて四季折々の種々相を描き出すスペシャリストであった。K氏の絵を見て蔵王山を取り込んだ人も多く、一般の画家とは異なる衆目を集めていた。盛岡には岩手山をモチーフにしていたH氏がいた。現場主義を買き、屋外にイーゼルを立てその姿を確認するかのように向き合っていたという。山に対峙しながら無言の会話を交わし、絵はその観察記録ではなかったかと思う。2人は山との会話の中で見つけたその時々の姿を描きとめてレポートしていた。山容の美貌を求めているだけでは辿りつかない何気なく発信している見落しそうな、自然界の表情を的確に捉えている。見続けることで生まれた会話を通して、郷里そのものを心の中に刻み込んでいくかのようだ。故郷を語るキーワードは他にもあるが、やはり最後に落ち着くのはなぜか山、全てを許し懐が深く、いつも見守り励まし続けてくれた無言の姿に祈りたい思いが湧いてくる。

蔵王山は前立の外輪山にはばまれて山形市街からその姿は望めない。それでも多くの人々は何度も登山することで体と心に覚え込む。戦中戦後花巻に疎開していた高村光太郎は盛岡市街からよく望める岩手山の眺望を街づくりに生かすことをことある度に口にしていたと聞く。

蔵王は子供の頃から何度も登っているが、岩手山は見るだけでまだ頂上には立っていない、それが悔しい。

## 白いノート 10

まあるい耳  
 今年16回目となる「若き画家たちからのメッセージ展」応募者の面接が始まった。この展覧会を通じて、毎年美術を志すたくさんの方々の作家たちと出会ってきた。応募から展覧会開催まで、彼らと関わるのが私にとっては毎回よい刺激となる。そしてこんなエッセーの一節を思い出す。「探しものを見つけないか」と思っている時が一番いいのです、耳がまあるくなっていますから、館長の面接の時や展覧会の会期中、自分の作品がどのように受けとめられるのか、これからどのように制作、発表をしていくのがいいのか、必死に聞こうとする彼らの耳はみんなまあるい。なにかを求め、一心で吸収しようとするまっすぐな姿勢にハッとさせられる。大事なものはどう見つけるまでには時間がかかるが、彼らにはその一生懸命な気持ちをおぼれないうちに思いつく。そして私もまあるい耳を持ち続けたい。

高橋玉恵



